様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２２　年　５　月　３　日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2009
課題番号：19510286
研究課題名（和文）
　１９世紀東北日本の武士、農民家族の性と生殖ーー関藩の「育子仕法」と医療からみたー
研究課題名（英文）Pregnancy and Childbirth among *Samurai* and Peasant Families in the 19th century：an examination about the childbirth regulations and medical records of the *Ichinoseki Han*

研究代表者
沢山　美果子（SAWAYAMA MIKAKO）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・客員研究員

研究成果の概要（和文）：本研究では、東北日本の一関藩をフィールドに、一関藩の「育子仕法」のなかで作成された史料群をおもな手がかりに、武士、農民家族の性と生殖について、妊娠、出産という具体的な局面に即して追究した。その結果、「家」の維持・存続と子どもの養育との矛盾のなかにあった農民と下級武士は、堕胎・間引きなどによって出生をコントロールしようとし、そのことが、死胎披露書に記された高い死産率の原因と考えられることなどが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：On this essay my research focuses on sex and generation in *Samurai* and peasant families, through the childbirth regulations in *Ichinoseki Han,* North East districts of Japan. At the age, both lower class of *samurais* and peasants faced on a conflict about continuing their family line (*Ie*) and cost of child rearing. This essay tries to shed light the fact that *samurais* and peasants controlled their pregnancy and childbirth with an abortion and infanticides. Moreover, this essay demonstrated that artificial interventions caused high degree of stillbirth in the official fetal death certificates *Shitai Hirosho*) common in *samurai* and peasants families.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	700,000	210,000	910,000
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー
キーワード：歴史・生殖・医療・いのち・出産・東北日本・武士・農民

１．研究開始当初の背景

「性と生殖の世界は、人間存在における根源的重要性のゆえに男も女も含めて私たちの世界観そのものを揺るがせかねない」、そう述べて、荻野美穂が性と生殖の世界への着目

の意味を喚起したのは1988年のことであるが、1990年代前半以降、女性史研究にジェンダー視点が導入されることで、性、身体、産という新しい研究テーマが浮上してきた.

他方、日本近世における身体史研究の先駆的な仕事、樺山紘一の「養生論の文化」（1976年）は、近世養生論のなかに、近代の身体観を相対化する手がかりが含まれることを示唆し、また塚本学は、『生類をめぐる政治』（1983年）において、身体は日常生活史と政治史をつなぐ媒介項の一つと位置づけている。

本研究は、これらの先行研究に学びつつ、さらに出産や身体の問題を、①性と生殖という広がりのもとで考えることで、身体の問題を、人々の営みのなかで、また女性のライフサイクルとの関わりのなかで考えること、②性と生殖という私的領域まで入り込んでの秩序化が図られた近代以降と近世の連続、不連続の問題も視野に入れるなら、農民家族のみならず近代家族の担い手である新中間層の出自でもある武士層の問題も考慮に入れる必要があること、この二点を考慮し、武士と農民家族の性と生殖をめぐる問題を考察することを課題とした。

２．研究の目的

本研究では、東北日本の一関藩を主なフィールドに、藩の「育子仕法」のなかで作成された史料群や地域の医者の診察記録を手がかりに、武士、農民の性と生殖の世界を、妊娠、出産、子育てという具体的な局面で、また家族のライフサイクルとも関わらせつつ明らかにすることを目的とした。

とくに武士に対する懐妊、出産取り締まり、育子手当に関する研究は史料の発掘も含め、未開拓の分野である。しかし、この問題を考えることは、出産や生命の問題のみならず、現代の少子化問題を歴史のなかで相対化する視点を得るうえでも重要であり、いのちの視点からのジェンダー史を切り拓く手がかりも探ることを意図した。

本研究の特色は、①近年、各地域をフィールドに展開してきた生命観、身体観をめぐる研究にも学びつつ、一関藩という近世の人々が生きた現場に即し、とくに女性たちの身体に起きた具体的で歴史的な経験と、胎児・赤子のいのちをめぐる環境に焦点をあてたモノグラフを描くこと、②今までの懐胎、出産取り締まりに関する研究のなかでも未開拓であった武士層の出産や出産コントロールの問題を探ることで、農民、武士の性と生殖をめぐる問題を明らかにする点にある。

近世社会における妊娠、出産の問題を地域レベルで考えることは、近世から近代への重層的な展開を考えるうえでも必要な作業であり、また妊娠、出産という女性の身体の経験を明らかにすることは、身体に関する女性自身の主体的な経験を研究しないまま、身体を構築する力学のみを分析し、それが身体の歴史としてしまう傾向が強かった、これまでの身体史研究を問い直すことにもつながるだろう。

３．研究の方法

本研究では、一関藩の育子仕法のなかで作成された①一関藩家老の沼田家文書、一関藩領内狐禅寺村の小野寺家文書という城下町と農村の史料、②一関藩の藩医、建部清庵、在村医、千葉理安という、やはり城下町と農村の医者が残した診察記録を手がかりに、数量的、質的分析を行った。

沼田家文書には、育子仕法という制度に関わる史料群、着帯届、懐妊届、名号届などの諸届に関わる史料群、そして養育料支給に関わる史料群が残されている。これら育子仕法に関する史料群を相互にクロスさせ、また諸届から抽出できた939件の事例の数量分析を行うことで武士層の懐妊、出産への接近をは

かった。さらに、沼田家、小野寺家文書のなかの死胎披露書や育子手当に関する文書の質的分析、そして建部清庵らの診察の分析を重ね合わせることで、農民と武士の性と生殖をめぐる問題、とくに産むこと、産まないことをめぐる問題に、胎児と赤子のいのちの視点からの接近をはかった。

４．研究成果

本研究の主な成果は①人々は、人の形と性別を備えた小さな赤子として胎児の存在を認識しつつも、「家」の維持・存続にとり必要ないのちであるか否か、育てるか否かをめぐる選択をせまられていたこと、②武士、農民に共通する妊娠末期の死胎の多さは、出生コントロールの結果である可能性が高く、また農民の場合、死胎の男女差はみられないが、武士の場合は、死胎は女子が男子の2.6倍、第一子は、男子が女子の2.5倍という何らかの性別選択が行われた可能性を示す結果となっていることを、数量的な分析も用いて明らかにした点にある。

一関藩の育子仕法では、堕胎・間引きの禁止を意図して妊娠、出産の管理は幾重にも厳しく行われたが、こうした性と生殖への介入は、むしろ、女性の産む身体と子どものいのちへの人々の関心を強め、産むこと産まないことをめぐる選択を意識化させるものであったといえよう。

本研究は、こうしたいのちをめぐる武士と農民家族の選択の様相、そして胎児観という視点から堕胎・間引きの問題に接近することで、近世社会の出生コントロールが、働くこと、産むこと育てること、胎児のいのち、相互の矛盾をどう回避するかをめぐる様々な選択の結果としてあったことを明らかにし、その結果、今までの堕胎・間引き研究を再検討する視点を提示することが出来た。

特に、農民の場合は、農閑期、出生間隔、母体の問題、授乳の機会、子ども数、将来の労働力たりえるか否か、また武士の場合は「家」にとって必要な性別か否かをめぐる様々な選択がおこなわれていたことが明らかとなったことは、近世社会の出生コントロールが、今まで言われてきたような「家族計画」という言葉で表現できるような単一のものではないこと、また望まない妊娠の結果の処置として、堕胎・間引きは人々にとって切実な関心であったこと、また堕胎胎と間引きは、従来の堕胎・間引き研究で言われていたほど明確に区分できるようなものではなかったことも浮かびあがってきた。

今後は、村々に残された民間療法、そして育子仕法のなかでも重視された乳の問題を通し、いのちをめぐる生活文化の視点から、さらに武士と農民の性と生殖の問題を追究したい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

①沢山美果子、近世後期の「家」と女の身体・子どもの「いのち」―「いのちのジェンダー史」のために―、七隈史学、査読無、12 号、2010、3－17

②沢山美果子、江戸時代における子どもの行方、女性歴史文化研究所紀要、査読無、18 号、2010、117－131

③沢山美果子、一関藩の「育子仕法」からみた武士層の妊娠、出産、文化共生学研究、査読有、9 号、2010、59－82

④沢山美果子、出産と医療を通してみた近世後期の胎児・赤子と母の「いのち」、文化共生学研究、査読有、8 号、2009、55－74、www.law.okayama-u.ac.jp/library/books/1176101526/view_html

⑤沢山美果子、近世社会における捨て子の「養育」－岡山藩を対象に－、歴史と地理、査読無、日本史の研究、620 号、2008、1－12

⑥沢山美果子、捨て子はどこに捨てられたか？－19 世紀前半における西日本の捨て子―、順正短期大学研究紀要、査読無、36 号、2008、1－16

〔学会発表〕（計７　件）

①沢山美果子、近世後期の「家」と女の身体・子どもの「いのち」、七隈史学会第 11 回大会外国史部会主催・小シンポジウム「誕生と死の歴史―「いのち」について考えるー」、2009 年 9 月 26 日、福岡大学
②沢山美果子、近世における産むこと、産まないことと子どもの「いのち」、比較家族史学会研究大会第 51 回大会シンポジウム「歴史の中の「少子化」」、2009 年 6 月 20 日、大阪大学豊中キャンパス
③沢山美果子、近世における「産むこと」「育てること」と子どもの「いのち」、日本心理学会ワークショップ　「子どもを育てることの普遍性と特殊性～文化と進化とこころの未来（2)」、2009 年 8 月 28 日、立命館大学
④沢山美果子、Where were children abandoned? Abandoned children in the western part of Japan in the early 19th Century
The seventh European History Conference (ESSHC)、2008 年 2 月 26 日
⑤沢山美果子、近世民衆のいのちの諸相、社会思想史学会第 33 回大会セッション『人間』概念の変容と生命倫理、2008 年 10 月 26 日、慶応義塾大学
⑥沢山美果子、近世民衆のいのちの諸相、社会思想史学会大会第 33 回セッション、「人間」概念の変容と生命倫理、2008 年 10 月 26 日、慶応大学
⑦沢山美果子、「近代家族」と女性―歴史のなかの性と生殖、東北大学グローバル COE 国際シンポジウム、歴史における日本・韓国の家族とジェンダー、2007 年 12 月 1 日、東北大学

〔図書〕（計 4　件）
①沢山美果子、19 世紀東北日本の武士、農民家族の性と生殖――関藩の「育子仕法」と医療からみた―、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)研究成果報告書、西尾総合印刷、総ページ数、112 ページ
②沢山美果子、江戸の捨て子たち　その肖像、吉川弘文館、2008、総ページ数、196 ページ
③倉地克直・沢山美果子編、働くこととジェンダー、世界思想社、2008、140－189, 273－301 ページ
④沢山美果子他、「家族」はどこへ行く、青弓社、2007、12－63 ページ

６．研究組織

(1)研究代表者

沢山　美果子（SAWAYAMA MIKAKO）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・客員研究員
研究者番号：10154155